

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：53901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02913

研究課題名(和文)長期継続多読とその効果のしくみに関する実践的研究

研究課題名(英文)Case Study of a Long Term Extensive Reading Program

研究代表者

西澤 一 (Nishizawa, Hitoshi)

豊田工業高等専門学校・電気・電子システム工学科・教授

研究者番号：40249800

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：高専に7年間に在学した学生の多読授業受講年数と累積読書量、TOEIC得点との関係を調べた。多読2.5年(読書量68万語)ではTOEIC380点以下だったが、4.5～5.5年(読書量62～122万語)、6～7年(106～224万語)では、480～490点、540～575点へ上昇した。多読は長期継続が有利であり、読書量100万語が目安と判断できた。

次に約140万語読破した学生群：A群：平均3.7年継続(70名)とB群：平均6.4年継続(33名)を比較したところ、TOEIC得点上昇率はA群：124点/100万語、B群：166点/100万語であり、得点上昇率でも長期継続が有利であると確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、社会人、大学生の英語学習に効果があると広がりつつある多読であるが、高専生や理工系大学生のような初級者では効果が出るまでに時間がかかり、短期では顕著な効果がでていない。そこで、この研究では高専生を対象に4年ないし7年継続の長期多読授業を実践し、各学生の読書履歴、TOEIC等評価指標の変化を追加調査した。

5年継続で顕著な効果、7年継続の有利性等、長期継続の効果を確認できた。

研究成果の概要(英文)：The subjects were Japanese Engineering students aged 15 when they had joined the program after receiving three years of formal English education. They took at least a 45-minute weekly ER lesson for 30 weeks in each academic year along with several concurrent traditional English lessons, and stayed in the program for five years (Group A) or seven years (Group B). Their median TOEIC score was 384 or 441 when they had read a million words, and median score increase rate was 124 or 166 points per one million words. With these values, their English proficiency was estimated to reach 600 in TOEIC when they would have read 2.7 or 2.0 million total words of easy-to-read English texts. The score increase rate was three times as high as our former study with pioneer students. Seven years were confirmed to be a feasible duration for an ER program if it hoped to ensure that lower elementary EFL learners in the program improved their English proficiency to intermediate levels.

研究分野：教育工学

キーワード：多読 効果 長期継続 読書量 TOEIC

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバルに活躍する技術者養成を主眼とする高専、理工系大学では、卒業生に最低限の英語運用能力(中級の下: TOEIC470~600点)を期待されるが、TOEIC 全国平均点(2014年度、高専7年: 389点、理工系大学4年: 432点)を見る限り、学生の英語力は2007年度から一貫して初級レベル(470点未満)に止まっており、日常生活で英語を使わない外国語として学ぶEFL(English as a Foreign Language)環境下で理工系学生の運用能力を向上させることは容易でなかった。筆者等は、英文を和訳することなく読む「多読」により擬似的なESL(English as a second Language)環境を構築することで状況を改善できると考え、2003年から勤務校(高専)で多読授業を始めた。

未知語の意味を辞書で調べ、文法に従って解析し、日本語に翻訳することによって、英文一文一文の内容を積み上げて理解する精読に対し、テキスト全体の概要把握を優先して大量の英文を読む方法を多読(Extensive Reading)と呼ぶ。多読は当初、言語間距離の近い欧州人の英語学習法として導入され、使用語彙、文法、テキスト長を制御した段階別読本(Graded Readers: 以下GRと略称)も複数の出版社から刊行されている。また、その意義は、Day & Bamford(1998)、Grabe(2009)等により広く知られている。

EFL環境で英語を学ぶ日本人学習者には、GRよりやさしい絵本から始め100万語読破するよう提案する酒井(2002)と、絵本を含めた多読用図書を網羅し、英文レベル(YL: Yomiyasusa Level)を整理した古川等(2005)の啓蒙により、社会人を中心に、多読が広がりつつあった。また、初級EFL学習者には、授業内多読が必要との指摘(高瀬, 2010)に従い、授業内に読書時間を設ける授業内多読も始まっていた。筆者等による授業実践でも、授業内多読が高専学生の英語に対する苦手意識克服に効果があることを確認できていた(西澤他, 2006)。

しかしながら、短期間の多読では、読書速度と学習意欲面で効果が認められるものの、TOEIC等の得点上昇は顕著でなく、初級EFL学習者が本人にも自覚できる顕著な効果を上げるには、長期間継続が必要と考えられた。西澤他(2011)は、多読の効果は継続3年以下の短期では確認しにくいものの、継続年数を5年まで増やすと学生の累積読書量も増え、英語運用能力を無理なく中級レベル中ほどまで向上させ得ることを、授業外にも意欲的に読み続けた学生の追跡調査結果から報告している。さらに、多読初期にやさしい絵本を大量に読んだ学生は、TOEICの得点上昇率が高くなる可能性も示唆されていた。

2. 研究の目的

このように、社会人や、大学生、高専生の英語学習で効果が認められ、広がりつつあった英語多読であるが、初級EFL学習者では効果の現出に時間がかかり、短期プログラムでは顕著な効果を確認できていなかった。また、多読が効果を上げるしくみの解明も不十分であった。Nation(2014)は、多読が学習者の外国語運用能力を向上させるしくみを、母語習得と同様に意図しない語彙習得(incidental vocabulary learning)にあると解き、学習の対象となる新規語の出現頻度が高いGRを推奨、基本語9,000語を習得するために必要な総読書量を試算していた。しかしながら、日本人の初級EFL学習者の場合、特に、英語運用能力をTOEICで測定できない初級者の運用能力向上を語彙習得で説明するのは難しいと思われた。なぜなら、この時期までの多読で用いるGRは、基本語彙400語以下のやさしい英文であり、さらに、高瀬(2010)の薦める極めてやさしい英文は基本語彙250語以下であるため、多読で新しい語彙を習得することは考えにくいからである。社会人学習者や多読指導者からは、やさしい英文を読むことの重要性が語られ、高瀬(2010)は、多読初期に極めてやさしい英文を読むことが、その後の英語読解力向上に重要と述べている。

(1)極めてやさしい英文を大量に読むことにより、学習者が英文和訳を止めて英文直解に切り替え、その結果、英語情報処理が自動化されて処理速度が高まる、すなわちインプット処理の流暢性が高まることが、初級者の英語運用能力を高める主要因ではないかと筆者らは考えた。そこで、本研究では、多読が、初級EFL学習者の英語運用能力を高めるしくみが、語彙習得によるものなのか、それとも、英語情報処理の自動化による処理速度の上昇によるものなのかを明らかにすることを目指した。

(2)次に、多読が初級EFL学習者の英語運用能力を向上させ、その効果をTOEICで測定できるようになるのに必要な学習体験量(累積読書量)を見積もることとした。酒井(2002)の提案した100万語が、初級EFL学習者にも当てはまるかどうかである。また、週1~2回の多読授業で、平均的な学生がこの学習体験量を達成するために必要な多読授業の継続年数も推定することとした。

(3)学習体験量の見積もりに際し、TOEIC得点を顕著に上昇させるために必要な累積読書量が、多読授業の継続年数により異なる可能性が見えてきた。そこで、多読授業を受講する学生を継続5年群と継続7年群に分けて、それぞれに必要な累積読書量を推定することとした。また、両群の比較により、初級EFL学習者向けに推薦できる多読授業の継続年数も明らかになると考えた。

3. 研究の方法

(1)多読が初級EFL学習者の英語運用能力を高めるしくみが、語彙習得なのか、流暢性なのかは、多読初期(1~2年)に学習者が読んだ英文のレベルを調べることで判断できると考えた。語彙習得のためには、ある程度の新規語彙を含むレベルの本を読む必要があるが、流暢性を高めるためには、「分かる」情報を処理するために、よりやさしい英文を大量に読む方が効果を期待

できるからである。そこで、学生の多読初期 40 万語の読書記録を調査し、累積 100 万語前後の TOEIC 得点上昇率と、0~40 万語に読んだ本の英文レベル (YL) 層別読書量の関係を分析した。語彙学習が主因であれば、高い YL の本を読んだことが TOEIC 得点上昇につながり、流暢性の向上が主因であれば、逆に YL が低くやさしい英文を読む方が、TOEIC 得点上昇率は高くなると考えられるからである。

(2)2006~2017 年 (3 月) に専攻科を修了した 50 名の学生の学習履歴の時系列分析から、初級 EFL 学習者の英語運用能力向上を TOEIC 得点で測定できるようになるまでに必要な学習体験 (累積読書量) のしきい値を調べた。また、週 1~2 回、45 分の多読授業で平均的な学生が、このしきい値を達成するのに必要な多読授業の継続年数についても見積もる。在学中に TOEIC を 3 回以上受験した学生について、各学生の TOEIC 得点と受験時の累積語数との関係を調査し、読書量 100 万語前後における TOEIC 得点上昇率を分析した。

(3)2005~2015 年度に本科 3 年生に在籍した 365 名の学生のうち、累積読書量 100 万語以上を読破し、計 3 回以上 TOEIC を受験した学生 103 名を 2 群: 5 年間受講した学生 70 名と、7 年間受講した学生 33 名とに分けて、読書量 100 万語前後における TOEIC 得点上昇率を比較した。また、この得点上昇率から、平均的な学生が TOEIC600 点を取得するのに必要な累積読書量を推定した。両群の学生が読んでいた多読用図書については、読書量 40~100 万語における英文レベル (YL) 層別の読書量分布で同等性を確認した。

4. 研究成果

(1) 専攻科まで含めて 7 年間在学し、2012~2013 年度に専攻科を修了した 14 名の学生の学習記

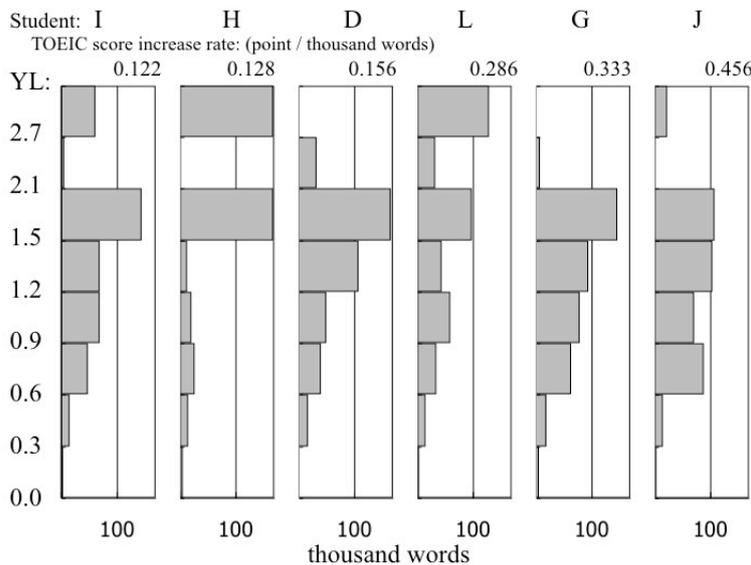


図 1 YL 層別読書量分布 (累積読書量 0~40 万語)

録と TOEIC 得点との関係を追跡調査した。修了時の累積読書量は平均 145 万語、最低 102 万語で、TOEIC 平均点は 562 点だった。対象学生は、在学中に TOEIC を 7~16 回受験しており、受験時の累積読書量と TOEIC 得点から、読書量 100 万語前後における TOEIC 得点上昇率 (読書量千語当たり) を算出した。TOEIC 得点上昇率は、最初の 40 万語に読んだ図書の英文レベルの影響を受けているようである。典型的な 6 名の学生 (D~J) の 0~40 万語に読んだ英文レベル (YL 層) 別読書量分布を、TOEIC 得点上昇率順に並べてみると、特に YL1.4 (基本語彙 300 語) 以下の極めてやさしい英文を多く読んだ学生が、累積読書量 100 万語前後での

TOEIC 得点上昇率が高くなっている傾向が見て取れた (図 1) (Nishizawa & Yoshioka, 2016)。多読初期に極めてやさしい英文を読むことの重要性を確認、多読が初級 EFL 学習者の英語運用能力を高めるしくみは、語彙習得ではなく、流暢性を高めることにあると判断した。また、この過程で (有効性を示すデータはないが) 朗読音声利用の有効性を認識し、この時期以降の学生に対しては朗読音声を活用した聴き読み (全文朗読音声ポーズすることなく聴き、朗読のペースに合わせてテキストを読む) を積極的に行うよう指導するようになっている。

(2)次に 2006~2017 年 (3 月) に専攻科を修了した 50 名の学生を対象に、多読授業受講年数 (3~7 年) と、累積読書量、(3, 6, 7 年次の) TOEIC 得点との関係を調査した (表 1, 2)。本科 3 年次では、多読授業継続年数が増えたとき (1.5 より 2.5 年が) 累積読書量は 41 万語から 68 万語まで増えたものの、TOEIC 平均点は 350~380 点に止まり、得点上昇はみられなかった。専攻科 1 年 (6 年次) では、多読授業継続年数が増えたとき (1.5~3.5 年より 4.5~5.5 年で) 累積読書量が 37 万語から 62~122 万語まで増えるとともに、TOEIC 平均点は 410 から 480~490 点へと上昇した。また、専攻科 2 年 (7 年次) でも、多読授業継続年数が増えたとき (3~4 年より 6~7 年で) 累積読書量が 77 万語から 106~224 万語まで増えるとともに、TOEIC 平均点は 470 から 540~575 点へと上昇した。

多読授業継続年数が 3 年以下のときは、累積読書量平均 70 万語でも TOEIC 得点上昇は確認できないが、継続年数が 4 年以上の場合は TOEIC 得点が顕著に上昇しており、(年間 14~32 万語の平均読書ペースを確保できているのであれば) 累積読書量に注目するよりも、多読授業継続年数

(4年以上)を確保する方が、実践上は重要である可能性が示された(Nishizawa et al, 2017)。また、継続7年の学生が特に高得点を取得していることは、注目に値する。

表1 累積読書量と年間読書ペース(中央値、万語)

学生群 修了年度 学生数	A 2006-2008 12	B 2009-2011 14	C 2012-2013 13	D 2014-2017 11
本科3年	— ^{*1}	41.0 ^{*2} (1.5年間) 27.3/年	48.4 (in 2.5年間) 19.4/年	67.9 (2.5年間) 27.2/年
専攻科1年 (6年目)	37.2 (1.5~3.5年間)	62.9 (4.5年間) 14.0/年	100.0 (5.5年間) 18.2/年	122.0 (5.5年間) 22.2/年
専攻科2年 (7年目)	77.0 ^{*3} (3~4年間)	106.0 ^{*4} (6年間) 17.7/年	130.0 (7年間) 18.6/年	224.0 ^{*5} (7年間) 32.0/年

*1 記録なし, *2 2011修了生3名, *3 2006修了生2名と2007修了生4名,
*4 2009修了生1名と2010修了生3名, *5 2014修了生1名と2016修了生3名

表2 TOEIC 得点(平均値、標準偏差)と年間得点上昇率

学生群 修了年度 学生数	A 2006-2008 12	B 2009-2011 14	C 2012-2013 13	D 2014-2017 11
本科3年	— ^{*1}	378 ± 59	348 ± 29	380 ± 68
専攻科1年 (6年目)	411 ± 58	491 ± 74 +38/年	484 ± 51 +45/年	490 ± 80 +37/年
専攻科2年 (7年目)	468 ± 70 (6 ^{*2})	540 ± 32 (4 ^{*3})	548 ± 69 +43/year	575 ± 54 (4 ^{*4})

*1 TOEIC 受験者なし, *2 2011修了生3名, *3 2006修了生2名と2007修了生4名,
*4 2009修了生1名と2010修了生3名, *5 2014修了生1名と2016修了生3名

(3)2005~2015年に本科3年生に在籍した365名の学生のうち、241名(66%)が累積100万語以上を読破していた。このうち計3回以上TOEICを受験した学生103名を2群:5年間受講した学生70名(A群:平均3.7年継続)と、7年間受講した学生33名(B群:平均6.4年継続)とに分けてTOEIC得点上昇率を比較した。累積読書語数は、A群が143万語、B群が140万語と同等で、平均読書ペースはA群が、年間39万語、B群が年間24万語であり、週45分×30回の授業時間と、同量の自習時間を用いて毎分100語で読んだ場合(27万語)の1.4倍、0.9倍であり、A群は(5年間)頑張って多読を進めた学生、B群は(7年間)普通に多読を進めた学生と理解できる。

表3 累積読書量とTOEIC得点

(中央値 ± 標準偏差)	A群	B群
学生数(全学生に対する比率)	70 (21%)	33 (100%)
継続年数(最終TOEIC時)	3.74 ± 0.65 年	6.44 ± 0.67 年
累積読書量(最終TOEIC時)	1.43 ± 0.81 万語	1.40 ± 0.92 万語
年間読書ペース	38.6 ± 25.2 万語	23.7 ± 15.1 万語
初期TOEIC(3年次秋)	385 ± 55	360 ± 49
100万語読破時推定TOEIC*	384 ± 76	441 ± 61
最終TOEIC	475 ± 91	550 ± 66
TOEIC得点上昇率* (点/100万語)	124 ± 78	166 ± 91
TOEIC 600到達推定読書量	274 万語	196 万語

* 各学生の読書量とTOEIC得点の回帰直線から推定した値

両群の最終TOEIC平均得点はA群:475点、B群:550点であり、読書語数に対するTOEIC得点上昇率も、A群:124点/100万語、B群:166点/100万語とB群が有意に高かった。7年間多読を継続した学生は、読書ペースを上げなくてもTOEIC得点が顕著に上昇し、より短期間にハイ

ペースで読む学生よりも、読書量当たりの得点上昇率が高く、例えば、TOEIC600点を達成するための推定読書量は、A群の（5年間で）274万語に対し、B群では（7年間で）196万語で済むことになる（Nishizawa et al, 2018）。これらのことから、高専生対象の多読プログラムでは、本科と専攻科を合わせた7年の修学期間を活用し週45分の多読授業を7年継続させることを推薦する。7年継続多読授業を実践できれば、専攻科修了時に同世代の理工系大学生を大きく上回る英語運用能力を持つ高専生が続出することとなる。

ここで、A群とB群の得点上昇率の差は、英文レベルの違いではなく、継続年数の違い（により生じた要因）によるものであることを確認した。すなわち、103名の学生の内27名の学生の読書記録から40～100万語読書時の英文レベル（YL層）別読書量を調べたところ、TOEIC得点上昇率が50点/100万語と顕著に低かったA群の3名（表3の低上昇群）を除き、A群とB群の層別読書量分布に差異はなかった（表4）。また、この表からは、A、B群とも学生は基本語彙800語以下の極めてやさしい英文で40～100万語の8割以上を読んでいることが分かり、彼らの英語運用能力向上を語彙習得では説明できないことを再確認できた。

表4 YL層別読書量分布（累積読書量40～100万語）

YL層	基本語彙	属するGRの例	YL層別読書量（万語）		
			低上昇群 (N=3)	A群 (N=17)	B群 (N=9)
2.7-3.6	1,000 - 1,400	MMR3, PGR3, OBW3, MMR4, CER3	12.2	10.8	8.7
2.1-2.6	600 - 800	PGR2, OBW2, CER2	27.1	17.3	16.5
1.5-2.0	400 - 600	MMR2+, OBW1	17.8	19.6	20.7
1.2-1.4	350 - 400	FRL7, MMR2, CER1	2.2	8.3	8.5
0.9-1.1	200 - 300	ORT9, FRL4-6, OBW0, CER0, PGR1	0.7	3.2	3.4
0.6-0.8	75 - 300	ORT6-8, FRL1-3, MMR1, PGR0	0.3	1.0	1.9
0.3-0.5	-	ORT3-5	0	0.1	0.3
0.0-0.2	-	ORT1-2	0	0	0

まとめ

多読が初級 EFL 学習者の英語運用能力を高めるしくみは、主として英語情報処理の流暢性を高めることであり、そのためには、初期に極めてやさしい英文を豊富に読むことが重要であることが確認できた。また、初級 EFL 学習者の英語運用能力向上を TOEIC で測定できるようになるには、週1～2回45分の多読授業で4年以上の継続が必要である。さらに、多読授業実践では、継続年数が重要な要因であることが分かった。例えば、（年間20万語以上の読書ペースが保たれていることが前提かもしれないが）多読授業継続5年と継続7年を比べた場合、平均的な学生がTOEIC600点を獲得するために必要な累積読書量は、前者で270万語、後者では200万語と推定され、継続7年では（それほど頑張らなくても）学生の英語運用能力が伸びていることを確認できた。今後は、早期に流暢性を高める方法を調べることに実践上の意義があろう。

<引用文献>

- ① Day RR & Bamford, J 1998, *Extensive reading in the second language classroom*, Cambridge University Press, Cambridge.
- ② 酒井邦秀 2002, 快読100万語！ペーパーバックへの道, 筑摩書房.
- ③ 古川昭夫 & 伊藤晶子 2005, 辞書を捨てれば英語が読める100万語多読入門, コスモピア.
- ④ 西澤一, 吉岡貴芳, 伊藤和晃 2006, 英文多読による工学系学生の英語運用能力改善, 電気学会論文誌A 126(7), 556-562.
- ⑤ Grabe W 2009, *Reading in a Second Language: Moving from Theory to Practice*, Cambridge University Press, Cambridge.
- ⑥ 高瀬敦子 2010, 英語多読・多聴指導マニュアル, 大修館書店.
- ⑦ 西澤一, 吉岡貴芳, 伊藤和晃, 長岡美晴, 弘山貞夫, 浅井晴美 2011, 英語多読が効果を上げるしくみと多読授業の成否要因に関する一考察, 工学教育, 59(4), 66-71.
- ⑧ Nation P 2014 How much input do you need to learn the most frequent 9,000 words?, *Reading in a Foreign Language*, 26(2), 1-16.
- ⑨ Nishizawa H & Yoshioka T 2016 Longitudinal Case Study of a 7-year Long ER Program, *Proc. Of 3rd World Congress on Extensive Reading* 28-40.
- ⑩ Nishizawa H, Yoshioka T & Ichikawa Y 2017, Effect of a six-year long extensive reading program for reluctant learners of English, *Modern Journal of Language Teaching Methods* 7(8) 269-276.
- ⑪ Nishizawa H, Yoshioka T & Ichikawa Y 2018, Benefits of Long Term Extensive Reading Program in English as a Foreign Language, *Language, Individual & Society*, 12, 9-23.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Hitoshi Nishizawa, Takayoshi Yoshioka, Yuri Ichikawa	4. 巻 6(1)
2. 論文標題 Book-Talk: An Activity to Motivate Learners to Read Autonomously in a Foreign Language	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Language and Cultural Education	6. 最初と最後の頁 145-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2478/jolace-2018-0010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hitoshi Nishizawa, Takayoshi Yoshioka, Yuri Ichikawa	4. 巻 12
2. 論文標題 Benefits of Long Term Extensive Reading Program in English as a Foreign Language	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Language, Individual & Society	6. 最初と最後の頁 9-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hitoshi NISHIZAWA, Takayoshi YOSHIOKA, Yuri ICHIKARWA	4. 巻 7-8
2. 論文標題 Effect of a six-year long extensive reading program for reluctant learners of English	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Modern Journal of Language Teaching Methods	6. 最初と最後の頁 269-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hitoshi NISHIZAWA, Takayoshi YOSHIOKA, Miharu NAGAOKA	4. 巻 50
2. 論文標題 How many words should elementary EFL learners read extensively and from which readability levels	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 豊田工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西澤 一、飯沼 恵子	4. 巻 55-3
2. 論文標題 コミュニティが広げる図書館多読の可能性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代の図書館	6. 最初と最後の頁 116-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hitoshi Nishizawa, Vuong Ho, Takayoshi Yoshioka, Yuri Ichikawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Cooperation of Two Extensive Reading Programs in Japan and Vietnam	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of 2016 JSEE Annual Conference	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20549/jseen.2016.0_16	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 100万語達成までの図書と読み方
3. 学会等名 日本多読学会関西指導者セミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 図書館の多読支援：東海地方の実例
3. 学会等名 日本多読学会九州多読教育セミナー (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西澤 一、吉岡貴芳、市川裕理
2. 発表標題 100万語読破者における継続年数の効果
3. 学会等名 日本多読学会年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 大学における英語多読の課題
3. 学会等名 青山学院大学教育人間学部創立10周年シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hitoshi Nishizawa, Takayoshi Yoshioka, Yuri Ichikawa
2. 発表標題 Benefits of a Long-term Extensive Reading Program in English as a Foreign Language
3. 学会等名 12th Int. Conference, Language, Individual & Society(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 NISHIZAWA Hitoshi
2. 発表標題 Why and How Should We Incorporate Extensive Reading into English Education in Japan
3. 学会等名 ETJ Chubu Expo(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 豊田高専における長期継続多読の実践例
3. 学会等名 日本多読学会 英語多読指導名古屋セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 図書館における生涯学習としての多読支援：東海地方の事例
3. 学会等名 日本多読学会 九州多読教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 高専図書館における多読支援の実践例
3. 学会等名 第103回 全国図書館大会 第4分科会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Keiko IINUMA, Hitoshi NISHIZAWA
2. 発表標題 How Could Libraries Support Lifelong ER of Adult EFL Learners?
3. 学会等名 The 4th Extensive Reading World Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hitoshi NISHIZAWA, Takayoshi YOSHIOKA
2. 発表標題 Appropriate Readability Levels for Elementary EFL Learners
3. 学会等名 The 4th Extensive Reading World Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 英語多読のしくみと指導上のポイント
3. 学会等名 外国語教育メディア学会中部支部 春季中部支部研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 多読用図書と活用例
3. 学会等名 日本多読学会 関西指導者セミナー (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hitoshi Nishizawa, Takayoshi Yoshioka
2. 発表標題 How Adult EFL Learners Should be Guided to Lifelong Learning with ER
3. 学会等名 9th Annual Extensive Reading Seminar
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 英語多読による学生の英語力向上と図書館を通じた社会貢献
3. 学会等名 H28年度 全国高専教育フォーラム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西澤 一
2. 発表標題 英語多読による地域の生涯学習支援
3. 学会等名 東海地区大学図書館協議会 第70回研究集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西澤 一、 吉岡貴芳
2. 発表標題 100万語読破者における、初期40万語の英文レベルの影響
3. 学会等名 日本多読学会年会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西澤 一、米澤 久美子、栗野 真紀子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本図書館協会	5. 総ページ数 198
3. 書名 図書館多読のすすめかた	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	市川 裕理 (Ichikawa Yuri) (50782596)	豊田工業高等専門学校・一般学科・講師 (53901)	